項　目　名	左マヒがあるが、車椅子で徘徊するため、安全ベルトで縛る
表　　題	左マヒがあり、車椅子座位がとれず、ズリ落ちやすいが自力駆動するケース
施　設　名	老人保健施設『たかのこ館』（介護老人保健施設）

1　利用者の状況

【病名（既往症）及び病状】

H9/8/1 頃より、痴呆症状みられ、徘徊して家に帰れなくなる事があった。

H9/12/17 に脳梗塞にて、左半身マヒ（左空間失認による左半身の無視）にて車椅子使用となる。

2　施設内の生活における現状や課題

【身体的な状況】

•左半身マヒで歩行は不能であり、トランスファーは一部介助である。

【痴呆の状況】

•記名力低下、見当識障害、昼夜逆転あり　　HDS-R　4/30 点

3　拘束に至った経過や原因と考えられるもの

昼夜逆転によるベッドからの転落の危険性があり、夜間の良眠を促すための離床を行う。日中車椅子で過ごす機会が増えるが、左片マヒ自力駆動による車椅子からのズリ落ち、転倒、左足の無視による車椅子のまき込みが頻発するため、車椅子座位安全ベルト、スベリ止めマットを使用した。

4　ケアカンファレンスでの意見や協議内容

•本人にとって安全ベルトは必要か。精神的苦痛はないか。・座位の姿勢について・健足側のマットレスは必要か。（時々フットレストによるけががある。）・マヒ足の固定について（マヒ足が、フットレスから落ちることがある）・家族の希望（縛って移動させてほしい）・リハビリスタッフによる立位訓練などを検討する。

5　拘束廃止に取り組んだ過程や取り組み状況

安全ベルトを使用することにより「虫がくいついている」と言われる事があり、自力駆動している車椅子の安全ベルトをはずしてソファーの移乗を促すと「わしの楽しみをうばうつもりか」と言葉を発せられるため、その精神的苦痛をどのように考慮することが課題となった。安全ベルトをはずし、車椅子を自力駆動する時座位姿勢がどのくらい保っているかを観察して座位姿勢が、くずれる時に姿勢を正すことにした。

また、右足と右手で駆動するため、フットレスによる創傷がみられ、右フットレストは除去した。左足はフットレスから落ちないように固定した。また、家族との話し合いを持ち、理解を得た。

6　改善の成果

車椅子での自力駆動することによって、本人の自力で移動する楽しみを継続でき、精神的苦痛が緩和された。座位姿勢の確保と障害物の除去により、安全な車椅子駆動が行え、安全ベルトなしでも車椅子からのズリ落ちがなくなった。

7　担当職員の感想、意見

安全ベルトがすべて安全ではなく、一人一人の職員が利用者の存在を認めたことで不必要なベルトが取れた事が介護の質を上げた。